東北復興日記 72

南相馬視察 言葉失う

ＪＫＳＫ結結プロジェクト実行委員
水本江理子さん

東京電力福島第一原発事故により、避難指示解除準備区域、居住制限区域、帰還困難区域およびそれ以外に地域を分断されている南相馬市が、「結結プロジェクト」第六回車座の開催地でした。

十二月二十日から二十一日、安倍昭恵首相夫人も参加し、首都圏、岩手、宮城、福島三県および地元から約百人が現地視察を交えて、復興の方向性を話し合いました。

原発から二十キロ圏内の「避難指示解除準備区域」である小高地区の沿岸部を視察した際に見た光景は印象的でした＝写真、山崎陽一撮影。決壊した防潮堤の切れ目から高い白波が見え、津波被害を受けた元水田には今なお撤去されていないがれきや廃車が点在し、津波被害を免れたものの住む人のない家屋を目の当たりにして、参加者は言葉を失いました。サルの姿も目にしました。

また、相馬藩主の菩提寺である同慶寺では、田中徳雲住職が放射能という見えない不安と闘うことの葛藤を話してくれました。家族はいわきに避難し、本人は毎日南相馬に通い、問題に向き合う勇気に心打たれました。

そして、最も心に残ったことは、二日目の「東北の美しい未来をつくるフォーラム」基調講演での桜井勝延南相馬市長の「自立することが必要」という言葉です。これはその後の車座で南相馬市の参加者から出された意見でもありますが、自ら問題解決していくという姿勢は、災害復興だけでなく、私たちが取り組まなければならない多くの社会課題の解決にも求められることだと思います。

とはいえ、放射能汚染や巨大防潮堤建設など、自分たちだけで解決できない問題も多くあります。地域の方が、結結プロジェクトの仲間をはじめとする日本中の人々と、これからも一緒に復興に取り組まなければならない、という意識を新たにした車座でした。

この連載は、東京のNPO法人「女子教育奨励会」と、被災地の女性たちが協力して復興に取り組む「結結プロジェクト」の協力を得て、掲載しています。